

## 青い鳥はいずこ？ 迷える幸せ。

眞鍋由比

今年の読書運動のテーマは「迷い」です。社会のO先生がおっしゃるように【人間は努力すれば努力するほど迷う】もの。さまざまな「迷い」の本が先生方によってピックアップされています。一番人気は本校がミッションスクールであるからか、遠藤周作の『沈黙』。この小説を原作にハリウッドで映画化されて今年公開予定なんだそうです。【スパイダー・マン】のアンドリュー・ガーフィールドや【シンドラーのリスト】のリーアム・ニーソン、浅野忠信、窪塚洋介らが出演する注目作だそうです。マーティン・スコセッシ監督作品！今、読んでいて損はない！

多彩な先生方の選書の中で『月と六ペンス』を紹介された英語のH先生の

「迷いのなさ」がまわりの人々を苦しめていく

の部分が印象的でした。

最近観た映画の中で『帰ってきたヒトラー』が抜群でした。ヒトラーが生きていて、現代のドイツにタイムスリップしてきた話です。そっくりさんのお笑い芸人としてテレビに出演、どんどん人気者になって映画に主演して…笑える場面も多々あるのですが、原作小説どおりではなく、実際にヒトラーとして町を歩いているときの今のドイツ人たちの偽りない反応が怖い。明らかに顔をしかめて背ける人や防犯スプレーを吹き付ける人もいるけど、大多数が歓迎していて移民を収容所に入れようだの、今度は俺も力になるぜだの、カメラの前でも平気で差別用語を連発する人たちの多さ！

映画のパンフレットには現在のドイツ人の祖母の世代が「ヒトラーは魅力的だった」と話していたと載っています。迷いなくドイツのために力を尽くす政治家としての彼は、守られる側から見れば魅力的だったのだ…世界史上最悪のホロコーストを実施した人間だったのに。確かに小説を読んでも映画を観てもヒトラーに魅力を感じてしまう部分があります。国民全体が一つの方向に迷いなく進むとき、危険な状態であることを認識しなくてはいけない、振り返って別の方向へ迷える余裕がないのは恐ろしいことだと思いました。Noといえる状態ではない国は異常だと。

幸せな国を探してアメリカ人のジャーナリストが世界中を迷うのがエリック・ワイナー『世界しあわせ紀行』ハヤカワ文庫2016。

売春とマリファナが合法的オランダが幸せなのか、ルールを遵守することで平和と清潔さを保つスイスが幸せなのか、王様が退位したがって民主主義の国にしようとしているのに国民が抵抗しているブータンが幸せなのか、国民が税金を払わずに大金持ちになってしまっていて、飛行機はいつもファーストクラスで、アメリカの大学すら国内に誘致してしまうカタールが幸せなのか？

アイスランドは特に経済が発展しているわけでもない、夏は白夜だけど冬は闇の中、太陽も出ない国。だけど「失敗」を尊んでくれる国。だから小国なのに芸術家が多い。とにかく失敗をおそれなくていい場所。「世間知らず」ナイーブということを嘲笑されることがないお国柄。それが以前「世間知らず」だと職を失ったエリックには魅力的に映ったようです。

エリックは日本にも滞在していて、世界一礼儀正しい国でいつも「ありがとう」「すみません」とあいさつばかりして気が狂いそうだったけれど、モルドバの何をしていても挨拶一つない社会より絶対いいと思いついたりしています。

また神戸女学院大の心理学の教授の実験、二つの大学生のグループの一つは何もせずに一週間すごし、一つは「この一週間他人のためにした親切を数えること」をさせたら後の方が幸せ度が高かったという報告をしています。親切をせよと言ったのではなくやった親切の数を数えただけ。利他的な行為が自身を幸せにする例ですね。エリックは幸せの国を見つけたのでしょうか？